

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 3 9 号

2022 年 3 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第 1 の手紙講解説教」より (9)

新約は罪の赦し、永遠の生命を頂くこと

主イエスは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれを割き、そして言われた、「これはあなたがたのための、わたしのからだである。わたしを記念するため、このように行いなさい。」食事ののち、杯をも同じようにして言われた。、「この杯は、私の血による新しい契約である。飲むたびに、私の記念として、このように行ないなさい。」(コリント I 11・23-25)

イエスが十字架につく前日の最後の晩餐を想像して下さい。イエスの生涯すべてがあなた方のためである。「わたしのからだである」というのは、聖書の用法並びにユダヤの宗教的慣例からすると、「私の身体を意味する」という意味であります。即ち、あなたがたの罪のため、救いのために死んだイエスの身体、生涯全体を意味しています。この聖餐の記事は、マタイ、マルコ、ルカ伝にも出てきますが、多少違ってきます。コリント前書が最も古く、マルコ伝が次に

来ますので、この2か所が基になっています。パウロは「感謝して」とありますが、マルコ伝では、「祝福して」となっています。また、パウロ書簡では、「このように行いなさい」とありますが、マルコ伝には、それがありません。従って、「このようにせよ」と言ったのはパウロです。

あたらしい契約から、新約聖書が生まれました。ここが新約聖書の要です。

「契約」という字は、マルコ伝にもでてきます。旧約は、モーセがシナイ山で神から十戒を頂き、これを守る者は神に祝福され、これに背く者は罰されるという契約であります。これに対して、新約は罪の赦しであり、永遠の生命を頂くことが内容であり、頂いた者が神の御旨に従うことでもあります。これを知らずして、新約聖書を論ずることは出来ません。

聖餐式

だから、あなたがたは、このパンを食し、この杯を飲むごとに、それによって、主がこられる時に至るまで、主の死を告げ知らせるのである。(コリント I 11・26)

この「告げ知らせる」は、英語の proclaim(宣言する)という意味であります。即ち、パンをとり、杯を飲むことは、主の死の意味を告白することであると言っているのであります。聖餐にあずかるということは、主の救いの伝道です。主の死の意味を伝道することです。過去におけるイエスの十字架、復活の意義を知り、現在において生ける主が、我々とともにいたまうことを信じ、即ち、永遠の生命の与えられるということを知り、将来は、主が再臨の時、我々の生命は完成することを信じる。聖餐は、これを宣言することであると言っています。即ち一言で言えば、聖餐は我々の信仰を形に現わすことであります。我々の信仰告白である洗礼と同じことです。

聖餐式 (2)

聖餐式の記事は、信ぜざる人にとっては、まことに不用の文字であるかも知れない。しかし、信じる者にとっては、ここにキリスト教の命があります。ヨハネ伝 3 章の初めのニコデモとイエスの対話を思い起こします。ニコデモの不理解なことによって、イエスの千古不磨の言葉が現れて来ました。ここでも、食事の問題から、友情、その友情の欠陥は信仰から来ている。その信仰を現す聖餐と掘り下げて、パウロの千古不磨の言葉が出ました。誠に不可思議なことですが、感謝に耐えません。

次に感じますことは、現在、聖餐は必要でないという人がいることです。これは、教会にとって、単に形式的なことではなく、必要欠くべからざるものであると思います。内村先生の集会で、何故先生は、聖餐式をおやりにならなかったか、これについては、天国で先生にお伺いたく思っています。この荘厳なる儀式を普通の教会がやって、その精神を汚しているという意味において、先生は、これをおやりにならなかったのではないかと思っています。

最後に、旧約と新約の言葉は、ここから出て来ていることを感じます。これはキリスト教の奥儀でありますから、急にお勧めすることは無理かと存じますが、極めて重要な場所です。ここにこそキリスト教の中心があります。

聖霊の賜物

コリント前書 12 章 1-3 節に、聖霊の見分け方について語っております。当時のコリント教会には、異教徒から転向してきた信者が多く居りました。そのため、彼らは、異教徒時代の慣習に従って、神の霊に満たされることについて間違った考えを持ち易い傾向にあったようであります。即ち、異教の神々が祭られ、その神々の預言者の如き者が多くいました。そこで、パウロはキリスト教の聖霊というものがどういうものであるかを明確に教えたのであります。これは、まことにわれわれ信者にとりましても、注目すべき箇所であります。次に 4-11 節にわたり、聖霊の賜物の種類について述べております。即ち、賜物は、同一の力、同一の聖霊から出ており、同一の目的を持っていることを論じています。

イエスは救い主であると告白する人は、聖霊に導かれた人
そこであなた方にいっておくが、神の霊によって語る者はだれも「イエス
はのろわれよ」とは言わないし、また聖霊によらなければ、誰も「イエス
は主である」ということは出来ない。(コリント I 12・3)

この「のろわれよ」とは、パウロが信者になる前に、「イエスは人でありなが
ら、自分は神の子であると言ったことに対してのろわれるべきことであると考え
ていました。ユダヤ人にとっては、神と自分を同列に置くことは死に値する
ことでありました。ギリシア人においては、神が人の形をもって世に現れるこ
とは、理解できないことであり、霊は、肉を離れたものであるという理解を持
っておりました。従って、イエスが、神であるということは到底考えられない
ことでありました。「イエスが呪われる」ということは、「イエスは人間である」
ということでもあります。従って、イエスを人間として見るということは、聖霊
を受けている人の見方とは違う、と言っております。

また逆に、パウロは、イエスを神の子とし、我が救い主とし、我らに永遠の
生命を与える神の子とし、救い主である、と告白する人は、聖霊に導かれた者
である、と言っています。この説明により、聖霊を受けた者がどのようになる
か、また、聖霊を受けていない者がどのようになるかを明確に説明しています。
これが聖書の解釈です。

聖霊は、我々の理性、冷静さをますます明らかにする

聖霊の働きにより、「イエスは神の子であり、我が救い主である」と告白する者が信者であります。告白、即ち、言葉とそれに伴う行い、即ち、神に対する忠信、神の栄光のために働くのであります。この「言」と「行」によって、聖霊を受けたか、受けないかがわかります。これがなければ、如何に大きな行ないができて、それはキリスト信者ではありません。神に仕える人は、人のために尽くすことです。信者という者が如何に難しいものであるかが分かります。教会に行つて、讃美歌を歌つていても、聖霊が降つてゐるとは言えません。我々の生活が、本当に人のためにやるという精神が起こつて来ないうちは、信者とは言えません。これではまだワタクシチャンです。聖霊を受けて、どのくらい自分が死んでゐるかが問題です。信仰は理性と常識を超えておりますけれど、これに反するものではありません。内村先生は、聖霊派の信者が聖霊が降つたと言つて大変興奮しているのをご覧になつて、この頃の牧師は生物学や数学の初歩を勉強する必要があると言われたことを思い出します。聖霊が降ることによつて、我々の理性と冷静さはますます明らかになる筈であります。これがパウロの聖霊の一般論であります。

霊の賜物

霊の賜物は種々あるが、御霊は同じである。務は種々あるが、主は同じである。働きは種々あるが、すべてのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じである。各自が御霊の現れを賜わっているのは、全体の益になるためである。すなわち、ある人には御霊によって智慧の言葉が与えられ、他の人には、同じ御霊によって知識の言葉、またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜物、またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。すべてこれらのものは、一つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである。(コリント I 12・4-11)

この後半には、賜物の種類が書かれています。その種類はまた、同一の聖霊から来て、同一の神の力によって動かされていることを述べています。すべての賜物、すべての勤め、すべての働きは、そういうものは種々あるが一つの源から来ている。即ち、神から来ている。そして、7節には、これらの賜物は、自分の利益のものではない。「全体の利益」すなわち、人のために神が与えて下さっているという意味です。

賜物の種類

まず、賜物の種類として、9種類書かれています。上等なものから下等なものに及んでいます。3種類に大別されます。第1は、8節、「知恵の言葉」と「知識の言葉」です。知恵と知識の区別は難しいが、知恵は神の計画、意思、愛、心などを悟ることであり、知識は神の救いに関することを知ることですが、同じような意味です。これらが神の賜物、人間の感覚をもっては外から見えない最高のものであるという。次は、第2種類として、五つ書かれています。「信仰」「いやし」「力あるわざ」「預言」「霊を見分ける力」があげられています。この信仰は、神を信じて、この世の艱難に耐えていく英雄的な信仰です。これは、イエス・キリストが神を信じて、御心のままに十字架にかかれたこと、これが信仰の最上位、手本です。ある学者は「物事が最悪に及んだ時、信仰は最善に働く」と言いました。この信仰の力は万人が欲しい。若い者にとっては、艱難に勝てるこの英雄的信仰が欲しい。歳をとって来ると、これよりももっと上位の神の知識が欲しくなります。「いやし」あるいは「力あるわざ」も魅力的です。また、「預言」は、神の国の過去、現在、未来について知り、語る力です。「見分ける力」が最後に来ています。さらに、二つ「異言」と「異言を解く力」が来ています。これらは、言葉の賜物です。私は、ここに雄弁さの賜物を入れてもよいと思いますが、最下位のものでしょう。

パウロは、11節において、これらは「一つの同じ御霊の働きであって、御霊

は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである」と結んでいます。

賜物はみな違うということは大事なことです。パウロはその違いを認めています。その量で言えば、10 タラントの人、5 タラントの人あり、また 1 タラントの人があります。しかし、これを与えた神は一つであると言う。そして、その目的も一つである。人のためであると言っておられます。種類はあるが、目的は一つであるということがパウロの主張です。これが分かった時、我々は、人をうらやんだりすることが無くなります。

賜物はすべて与えられたもの

以上のことはパウロの時代の話であって、現代には助けにならないというのではない。我々の学ぶことを考えてみたいと思います。

第1に、我々は今、「イエス・キリストはわが主なり」と告白できるかどうかにかかっています。洗礼は受けても、この告白をはっきり出来ない人がいます。

第2に、賜物の順番をよく見て下さい。人が喜びそうなことが最後に来ています。異言とか雄弁は、最下位です。アシジのフランシスは、全く能力の無いジュニパーという男に、「兄弟ジュニパーよ、勇気を出せ。お前は、神から最大の賜物をもらっているではないか。愛する心を。」と言って励ましたという話があります。パウロはこの後、13章において、最も尊い賜物、「愛」について語ろうとしています、我々年令を重ねていくと、この賜物が欲しい。欲しいものが変わって来ます。これは本当に良い賜物であるというものを、若い時に瞥見する必要があります。また、それを教える必要があります。人間の尊厳と偉大さの根本を知る者は誠に少ない。見える者から見えない者に行くということを感じます。 第3に学ぶことは、我々は皆、賜物を頂戴しているということであり、自分の力で獲得したものでなく、すべて与えられたものであることを知るべきであります。もし、これが本当に分かったならば、我々に人生の革命が起こって来ます。